



6084 復興住宅にみる生活文化の継承と景観特性の関 係：能登半島地震・被災集落の住宅・コミュニティ 復興にみる生活文化の継承(災害復旧・復興における 人・ネットワーク, 農村計画)

白浜, 晋平 ; 山崎, 寿一 ; 山口, 秀文 ; 川口, 麻子 ; 久保, 佳与子 ; 竹
田, 和樹

(Citation)

学術講演梗概集. E-2, 建築計画II, 住居・住宅地, 農村計画, 教育, 2011:565-566

(Issue Date)

2011-07-20

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(Rights)

本文データは学協会の許諾に基づきCiNiiから複製したものである

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90003070>



復興住宅にみる生活文化の継承と景観特性の関係

—能登半島地震・被災集落の住宅・コミュニティ復興にみる生活文化の継承—

能登半島地震 文化継承	震災復興住宅 ファード [®]	生活文化 集落景観
----------------	-----------------------------	--------------

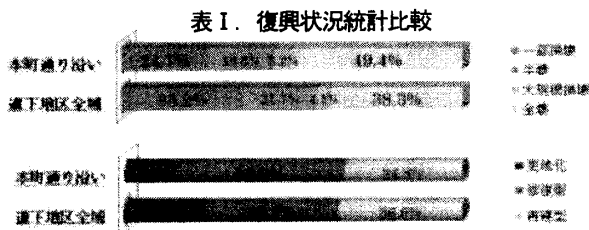
正会員	○白浜 晋平*1
同	山崎 寿一*2
同	山口 秀文*3
同	川口 麻子*1
同	久保 佳与子*1
同	竹田 和樹*1

1. 研究の背景と目的

本稿は2011年7月末、並びに10月中旬の能登半島地震被災集落・道下地区の調査報告である。道下集落のファード[®]に関する発表は既に行われており¹⁾、本稿はその続報として、当集落の中心軸として存在する本町通りに焦点を当て、その景観を決定する生活文化的な要因を示す。この本町通りは、被災を想定した計画的な地割となっており²⁾、また、毎年行われる夏祭りの中心的な空間となることがわかっている³⁾。

2. 復興状況とその傾向

まずは、本町通りに面する住宅群のH19.10時点での復興状況(図1、表I)から、復興の傾向を把握する。集落全域に対して、全壊判定の比率が高い反面、更地化の割合が低く、修復型復興のケースが多いことがわかる。この更地化の少なさと修復型復興の多さを生活持続意識の指標とすると、その意識の高さが見てとれる。



3. 伝統住宅の建築空間と景観の関係

ここで、震災以前の景観を把握するため、住宅Kを紹介する(図2)。住宅Kは大正時代以降のモデル的存在であるという自負があり、震災時は全壊判定を受けたが、修復型復興を選択した。

普段はへやとナンドを夫婦の寝室とし、元土間だった部屋で友達と世間話、客人はチャノマまで通して対応する。夏祭りの際は、縁の開口を大きく開き、ミセに飾るお供えとザシキの仏壇、玄関の幔幕が通りに見えるようにしつらえる。

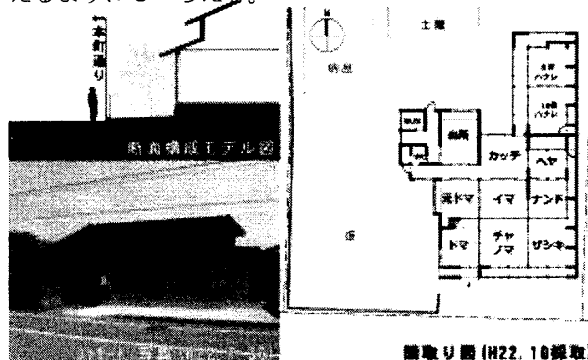


図2. 住宅Kの様子 (H22.10採取)

住宅Kは震災前のファード[®]の原型的な存在であり、その間取りには帰省者への配慮、来客への配慮、祭りへの配慮が見て取れ、その結果、本町通りに対する開放性がもたらされているということがみてとれる。



図1. 本町通り沿いの復興状況 (H22.10時点の現地踏査による)



図5. 本町通りの景観要素の分布図 (H22.07の現地踏査による)

4. 再建住宅の建築空間と景観の関係

再建された住宅にはどんな共通点があるのかを、再建に至った経緯をおさえ、住宅 K 同様、間取りとファサード断面を分析する再建時の考慮点をヒリング結果から整理する。ここでは再建依頼先の異なる2例を挙げる。

住宅 H の場合 (ハスメカが建設) (図3)

被害判定は全壊、再建は世帯主の親戚が務めるハスメカが行っている。震災前の間取りは住宅 K に酷似している。家族構成は母子2名、親兄弟11名とその家族が帰省する。

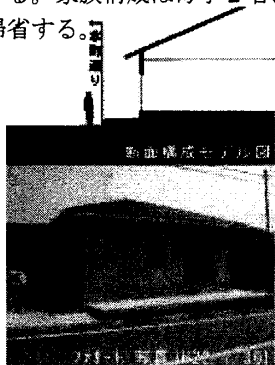
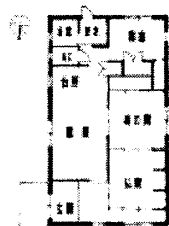


図3. 住宅 H の様子



間取り図 (H22.10撮影)

お供えを考慮した前面の開口部と、採光のために玄関の位置は要求している。また、以前の名残から住宅中央の壁を無くし、連続的な空間になるよう依頼したが、耐震性の面から実現には至っていない。

K家同様、低く大きな開口部、塀もなく、小さく後退して建築している。

住宅 S の場合 (地元建設会社が建設) (図4)

高齢女性の単身世帯である住宅 S も、全壊判定を受け、再建している。震災以前から再建予定があり、新しい間取りの検討に多く時間を取ることができた。

再建の際には、お供えの空間と玄関の引き違い戸、仏壇の位置を指定。また、ザシキの広さと DK とのつながり、玄関の広さと仕上げに特にこだわり、人の集まる場所を重点的に考慮した。収納スペースが多く、人が泊まる時を想定して寝室も用意したという。

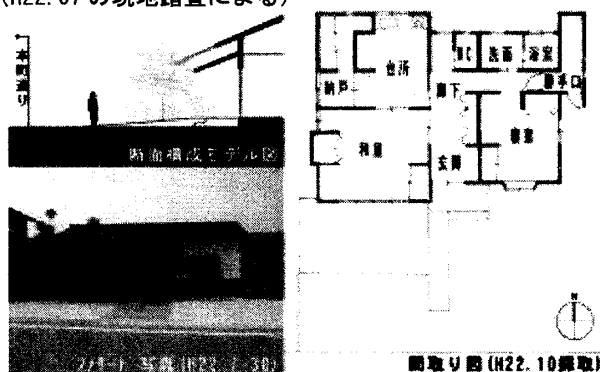


図4. 住宅 S の様子

5. 住宅にみる共通性から捉える景観

住宅 K, H, S には、共通して塀がなく、小さく後退し、玄関は引戸で、前面開口部が広いということがわかった。これは、現地踏査によって、他にも共通する特徴であることがわかったので図に示しておく (図5)。

6. 結論

被災を想定した計画的な地割と、大正時代からのモデルとなった住宅があり、そこで展開してきた生活文化が再建時の姿の中にも継承されていることがわかった。

この通りとの開放的な関係が住宅の平・断面の構成に表れており、それらの住宅群が連続的に並ぶことによって、本町通りの景観を形づくっている。この建築空間と集落空間の相互関係を保つ媒体として、生活文化の継承が存在していると言える。

謝辞

調査を行うに当たり道下区の泉精郎区長、門前町郷土史研究会・大蔵克男代表幹事、K氏・S氏・H氏、道下の住民の方々には多大なる協力をいただきました。深く感謝いたします。また、本論文は、財団法人住宅総合研究財団2010年度研究助成「能登半島地震・被災集落における住宅復興の生活文化論的検証(No. 1005、研究主査：山崎寿一)」の研究助成を受けて進めていることをここに記します。

引用・参考文献

- 1) 木村浩佑・山崎寿一：輪島市門前町諸岡地区道下の復興住宅に関する考察 (2007年11月, 12月調査より) 一能登半島地震・被災集落の住宅復興と地域再生—日本建築学会大会学術講演梗概集, 2008.09
- 2) 石川県教育委員会：石川県の民家—民家緊急調査報告書, 1972
- 3) 白浜晋平・竹田和樹・山崎寿一：能登半島地震被災集落・道下における夏祭りと集落空間の関係—2009.7.30-31の調査から—日本建築学会住宅系研究報告会論文集 5, p.123-130, 2010.12

*1 神戸大学大学院 博士前期課程

*2 神戸大学大学院 教授・博士(工学)

*3 神戸大学大学院 助手・博士(工学)

*1 Master Student, Faculty of Eng., Graduate School of Kobe Univ.

*2 Professor, Faculty of Eng., Graduate School of Kobe Univ., Dr. Eng.

*3 A. Prof., Faculty of Eng., Graduate School of Kobe Univ., Dr. Eng.